

開催地名：埼玉県鴻巣市	
開催日時	令和2年2月8日（土） 15：00 ～ 16：30
開催場所	鴻巣市文化会館クレアこうのす
語り部	島田 福男 （宮城県仙台市）
参加者	自治会長 約180名
開催経緯	関東平野北西縁断層帯による地震が発生した場合、市内で震度7の地震が発生する可能性がある。さらには、荒川の土手決壊による洪水の危険性もあることから、自主防災組織による防災活動を積極的に行っていく必要があるが、自主防災組織の平均年齢が高く、組織率も低いことが課題となっている。そこで、語り部の講演会を開催することで、防災意識を高めていくきっかけとしたい。
内容	（１）はじめに 東日本大震災発生から、もう間もなく9年が経とうとしている。災害の復旧、復興工事もかなり進み、仙台市に限って言えば、津波の被害を受けた沿岸部にも津波避難タワーを建設するなど、着々と工事も進んでいるところである。 私は東日本大震災当時、仙台市青葉区川平学区連合町内会長であった。山を切り開き、大規模団地開発を行った地域なので、東日本大震災時は地滑りが発生し、47世帯の家屋が倒壊した。本日は東日本大震災の前後で行った活動について紹介したいと思う。 （２）連合町内会の防災活動 私どもの町会は5つの町内会が集まった連合町内会である。平成14年に自主防災組織を立ち上げ、毎月1日を「防災の日」として、のぼり旗を150本用意して掲げている。また、防災無線器を22台購入するとともに、発電機や炊き出し用の釜、ＡＥＤなども揃えて備蓄していた。 さらに、平成22年4月に、地域の団体や学校などに呼びかけ、50団体からなる川平地区防災対策連絡協議会を設立し、月に1回定例会を開催している。また、防災研修会や講習会でHUG（10名くらいでおこなう避難所運営に係わるゲーム）、DIG（災害図上訓練ゲーム）やクロスロードなどと言うカードゲームを行っていたが、こうしたことが東日本大震災では役に立った。地震は、なかなか予知できない。いつ、どこで、どの程度の規模のものが起きるかは、誰にも分らない。そのため、前もって準備しておくことが絶対に必要である。みんなで話し合い、それぞれの地域のルールを決めておかなければ対応が難しいということである。平時にできないことは、災害時には絶対にできない。 （３）避難所での気づき ライフラインがストップするとどうということになるか。電気が止まれば信号

が止まる。照明がなくなって真っ暗になる。また、意外に盲点だったのが、家庭用の電話はほとんど使えないことである。コンセントに差しこんでいる電話は使用できなかった。一番役に立ったのは携帯電話で、通話はかかりづらかったが、ショートメールはとても便利だった。また、トイレ用の水の確保にも苦労した。飲料水は意外と何とかなるが、生活用水の確保は量も多く必要なため、大変である。具体的には近隣の小中学校のプールの水を利用した。

発災初期の避難所で有効だったのは、避難所カードである。カードを基に避難所運営を行った。避難者の問い合わせの際に活用したり、外出の際は所定の場所にカードを置き、帰ると戻してもらう。食事の時もカードをもとに名前を呼ぶ。カードを発行・利用することで整然と避難所運営を行うことができた。

（４）避難所運営マニュアル

震災前は仙台市では一律のものを使用していた。ところが実際の震災では、沿岸部は津波の被害を受け、中心部は帰宅困難者であふれてしまい、内陸部は地すべり、地割れと被害状況が地域によってまったく違う。一律のマニュアルでは対応できないため、193ある指定避難所において、それぞれ193のマニュアルを作成した。今は、そのマニュアルに従って地域ごとに防災訓練が行われている。防災については、地域でできること、行政でないとできないこと、それぞれ役割がある。役割をそれぞれが認識して、連携していくことが大切である。



開催地より

自主防災組織での活動歴が豊富な語り部のお話は、具体的でわかりやすかった。実際に避難所運営をする際に役に立つ情報を伺ったので、今後の防災意識醸成や自主防災組織活動の活性化を図っていきたい。